

日系移民史の教材化

——中学校社会科の場合——

田 中 泉*

1. 問題の所在

筆者は、先に、従前の中等社会科教育において日系移民史に関する視点が欠如していることを、日本社会が多文化共生時代を迎えつつある中での問題として指摘した。⁽¹⁾

その中で強調したのは、現在、日本に定住している日系移民が、言葉や制度、文化の違いなどによって日本人との間で起きる摩擦にさらされているということである。日本は、かつて、移民の送り出し国で、明治初期から1970年ころまで、多くの人々が故郷を離れ、ハワイやカリフォルニア、ブラジル、ペルーなどに新天地を求めて海を渡った。1990年代になって日本へやってきた日系移民はその子孫であるが、外見上は日本人でありながら日本語が話せない場合が多く、生まれながらの文化を持っている。祖先が同じであっても、必ずしも同じ文化を持つとは限らないのである。このため日本人から誤解を受けやすいこともあるが、それ以上に、互いの文化が異なっていることとその背景を、双方が正しく認識していないことが問題なのである。

すなわち、日系移民に対する誤解や偏見を取り除くためには、かつて日本に「出移民」の歴史があったこと、そして、現在の「入移民」の多くは「出移民」の子孫であるということを認識させることが必要なのである。また、かつての「出移民」の状況においても、現地での偏見、差別、誤解により、搾取や虐待が日常化していたという事実を認識することは、現在の「入移民」の状況への理解につながるのである。

本稿では、中学校社会科の歴史的分野において、現代の「入移民」をどのように

* 広島経済大学経済学部助教授

扱えばよいか検討する。現在の日本社会が多文化共生時代となりつつあることを認識するためには、高度経済成長以降の国際化の進展から理解しなければならない。そこで、歴史的分野の学習指導要領における最後の中項目である「高度経済成長以降の日本の動きを世界の動きと関連させてとらえさせ、経済や科学技術の急速な発展と、それに伴って国民生活が向上したこと、また国際社会において日本の役割が大きくなってきたことに気付かせる」を單元化して、その中に、日系移民の問題を⁽²⁾組み込む形で教材化する。

2. 単元の内容と意義

この単元では、高度経済成長以降の日本の動きを世界の動きと関連させてとらえさせ、経済や科学技術の急速な発展とそれに伴って国民生活が向上したこと、国際社会において日本の役割が大きくなってきたこと、また日本社会が多文化共生化しつつあることに気づかせるのがねらいである。それによって、歴史的分野の目標(3)のうち、「歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに、他民族の文化、生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う」を、高度経済成長以降⁽³⁾現在までの期間の歴史事象を扱うことで実現する。

この単元で扱う内容は、具体的には次の4つに分けられるが、④が新たに組み込んだ日系移民について扱う部分である。

- ① 東西両陣営の冷戦構造において資本主義諸国の一員として、日本が世界との関係を安定させる中で、重化学工業と科学技術の発達によって高度経済成長を達成したこと。また、それに伴って国民生活が向上した一方で、公害や都市への人口集中などによってさまざまな問題点が発生したこと。
- ② 石油危機およびドルショックにより、世界的な経済の混乱がおり日本でも高度経済成長が終了したこと。その後、資本主義諸国の経済活動が活発化し、社会主義諸国の自由化をきっかけに冷戦が終結に向かう中で、安定的に発展していた日本の経済が異常なまでに過熱しバブル経済となったこと。
- ③ 冷戦の終結後、世界各地で地域紛争が起り、国際平和や国際協調の必要性が高まっている中で、日本の果たすべき役割の重要性が増大していること。
- ④ 地球規模での国際化が進展して、日本と世界のあいだでの人の移動が活発になり日本でも多文化共生社会が形成されつつあり、異文化に対する尊重の態度が求められていること。

この単元は、歴史的分野の学習の最後に行われるものであり、学習を通じて現代

社会の歴史的意義を理解するとともに、現代社会に存在するさまざまな課題を知り、自らがこれから生きていく上で適切な日本社会の将来像を創造することができる基礎的な資質を形成するものである。また、公民的分野の学習への橋渡しにもなる。

新学習指導要領のもとでこの教材を学習する生徒は、もっぱらバブル経済崩壊以降の停滞した経済状況しか経験していない。すなわち、高度経済成長を経験していない生徒にとって、教える側には経験上簡単に理解できる経済の右肩上がりの急成長や国民生活の向上も、認識するには困難を伴う。統計を使うにしても、GDP（国内総生産）などの大きな数字ではなく、食料の価格や公共料金の変化など生徒にとって身近な材料を用いなければ理解できない。

また、彼らは、世界的に見れば冷戦終結以後に育った世代である。その認識においては、ソ連も、東・西ドイツもない。国際紛争といえば、イラク問題に代表されるような国際社会全体に敵対する国による問題という図式か、ユーゴスラヴィア紛争のように1つの地域における民族・宗教対立という図式しか知らないため、日本は、当事者ではなく、常に国際社会に同調しつつ、その問題や紛争の解決に協力している国と認識されているはずである。

一方、彼らは、このような世界の政治・経済の動きと、日本の国内の状況に関連付けて理解することには、慣れている世代でもある。それは、衛星放送やインターネットなどのメディアの発達によって、世界のニュースをほぼ同時に知ることができるからである。ただ、自分たちの身の回りの社会に、外国の商品があふれ、外国人が住むようになっていくことについては、それが当たり前と思うものの、それが何故なのか、どのような経緯を経ているのか、その背景を知ろうとは考えないだろう。

これからの多文化共生社会に生きていく生徒には、日系移民も含めて異文化を持つ外国人が身近にいることに対してあるいは彼らの文化そのものに対して、反感や排除の気持ちを持つことがないように、異文化を尊重する態度を育成するべきである。そのためには、日系移民も含め日本に定住する外国人が増加した歴史的背景を正しく理解させることが大切である。

3. 教 材 観

この単元は、日本の高度経済成長以降、つまり1960年代以降、現在までの約40年間の、日本の政治、経済、社会、文化、科学技術の変化を、世界の政治・経済の動きと関連させながら捉えさせようというものである。この時期の日本は、世界の国々の一つとして、いっそう世界の動きに影響されつつ成長してきたからである。

従前は、日本の動きと世界の動きを別々に学習させることが一般的で、学習者に世界の一員としての日本という認識を与えられにくかった。21世紀には、よりいっそう地球規模での国際化が進み、ボーダーレスな状況となり、ヒトやモノの往来は増え、日本での多文化共生社会の形成は進むと思われる。これからそのような社会に生きていく日本人にとって、異文化を尊重するという態度は重要である。

この單元では、まず、その40年間の世界と日本の関係を、高度経済成長の時代と、それを終わらせた石油危機の影響を受けた時代、冷戦の終結後の時代と3つに分け、段階的に捉えさせる。そして、さらに、未来の日本社会を担う者にとって重要な考え方、多文化共生社会について理解させたい。

(1) 高度経済成長の時代

日本が高度経済成長を達成しえたのは、もちろん国民一人一人の努力もあったが、国際社会における諸外国との安定した関係作りがあったことも認識させなければならない。

すなわち、高度経済成長が始まった1960年には、アメリカとの間で新安全保障条約が結ばれて、日米両国の関係は密接になり、その後小笠原・沖縄の返還も実現した。その背景には、東西両陣営による冷戦構造がある。資本主義諸国は、アメリカと西ヨーロッパを中心に、安全保障面と経済面で結束を強めつつあった。この過程で、日本も、資本主義諸国の一員として西側自由主義陣営に組み込まれ、外交的に安定した。このため、貿易量も増大し、いっそうの経済成長が可能になったと見るべきである。

高度経済成長が国民にとって、良い面ばかりではなかったことも、理解させるべきである。この経済成長は、主に、重化学工業の発展によるものだったが、生産を重視するあまり、環境への配慮をないがしろにし、河川・海洋や大気汚染がおり、住民の健康が被害を受ける公害が発生した。また、大都市への人口集中は交通混雑やゴミ処理の問題、住宅不足などを発生させる一方で、農村の過疎化や高齢化をもたらしたことも理解させたい。

(2) 石油危機以後の時代

日本に高度経済成長が終了したのは、石油危機が起こったからであるとするれば、やはり、この時代の日本も、世界の動きと密接に関連しているという視点で理解させたい。1973年に起こった中東戦争が引き鉄になり、石油価格が高騰し、先進資本主義諸国は、「オイル＝ショック」と呼ばれる大きな打撃を受けた。その中で、これらの影響によって、日本も経済が停滞し、高度経済成長の時代は終わったことが説明できる。

この影響はアメリカにも及び、国際的な通貨としてのアメリカ・ドルの価値が下がる「ドル＝ショック」が起こった。それとともに、他の資本主義諸国の経済力が上昇し、1985年にはプラザ合意が結ばれ、「円高・ドル安」基調の為替相場が定着した。そして、この円高により、日本も好景気に移行したが、そのために日米間で貿易摩擦が生じたりしたことは、世界と日本を関連させて認識する上では、重要な事象である。

貿易摩擦は、やがて日米間の経済戦争と呼ばれるほど激しくなったが、日本は、一時的に、それに勝利した。それは、ソ連や東欧の社会主義政権の崩壊があり、アメリカは冷戦を終わらせるために力を注ぎ、国内の経済を省みる余裕がなかったからで、この結果、日本では、金融を中心とした異常なまでの経済活動が行われ、後にバブル経済と呼ばれる状況になったことを理解させたい。

(3) 冷戦の終結後の時代

冷戦の終結は、20世紀全体を理解させる上でも、重要な事象だろう。冷戦という二極対立構造が崩れたことで、かえって、1990年代は国際平和・国際協調の必要性が高まったことを理解させたい。それは、国際秩序の安定性を欠き、二国間対立や地域紛争が頻発したことから説明できる。そのなかで、湾岸戦争のように、アメリカの軍事力が発揮されることが目立つようになった。90年代半ばからアメリカは好景気を迎えたが、日本はバブル経済の収束に失敗して景気が後退したのである。

したがって、このような世界の状況下で、日本が果たすべき役割を考察することが重要である。冷戦終結以前は、ODA（政府開発援助）などもっぱら発展途上国への経済的援助が中心だったが、間接的に日本の利益にもなる面があり、批判されることが多かった。ユーゴスラビアにおける民族紛争やアフリカのいくつかの地域での部族対立に代表される地域紛争の平和的解決は、国際連合が主導して平和維持活動（PKO）を行っているが、日本も協力していることを理解させたい。

(4) 多文化共生社会の時代

この時代は、地球規模での国際化が進み、それまでのものだけでなく、ヒト・モノ・カネの移動が活発になったことも重要である。特にヒトの移動が顕著であり、多くの日本人が海外に行ったり、住んだりすることが増えるとともに、日本国内へも多くの外国人が定住するようになっている。法務省の統計によれば、2001年末の時点で、外国人登録者数は177万人を超えている。これは、日本の総人口の約1.3%にあたる。その中では韓国・朝鮮人が約35%で約3分の1を占めるが、1980年には約85%であったことを考えると、その割合は急激に縮小したといえる。その逆に増えたのは中国人（21.4%）、ブラジル人（15%）、フィリピン人（8.8%）、ペルー人

(2.8%) などである。⁽⁴⁾

比較的以前から日本に定住していた韓国・朝鮮人がオールドカマーと呼ばれるのに対して、1990年代に入って増えた中国人、ブラジル人、フィリピン人、ペルー人たちはニューカマーと呼ばれる。また、彼らの大部分は、日系移民である。それは、1990年に入管法（正式には、出入国管理および難民認定法）が改定され、日系3世については、制限なく単純労働が認められる「定住者」と認定されるようになったからである。当時、バブル経済のもとで、工場や土木工事現場では労働力不足が深刻で、その解消を日系移民の雇用に求めたのである。

この「多文化共生社会」化は1990年代以降短い期間で進展したために、現在、ニューカマーの外国人とそれを取り巻く日本各地の地域社会には、さまざまな問題を生じさせた。その問題は、3つの範疇に分けることができる。第一は、言語上の問題で、多くのニューカマーの外国人が日本語の読み・書き・会話ができないことである。日本に住む外国人にとって日本語が不自由であることは、当然知るべき情報が不足し、医療、労働、学校など社会生活上の困難を伴うことになるのである。第二は、制度上の問題で、在留資格更新や職業選択、医療・社会保険、参政権、子供の教育・進路などが挙げられる。特に、「出稼ぎ」ではなく「定住」し始めた外国人にとって、子どもの教育と進路の問題は重要である。そして第三が、心の壁とも言うべき問題である。仮に、言語や制度上の問題を克服できたとしても、日本人は、同質性を優先し、異質なものを排除する傾向にあり、マイノリティに対する圧力が強いいため、日本人から受ける偏見という問題はなかなか解消されない。それは、もとより日本では、外国人を同じ社会の成員と認めることは一般的ではなく、「一時的な滞在者である」という認識が普通であったため、「日本が気に入らなければ母国に帰れ」という、単純で乱暴な排斥論が出てくるのである。

このように多文化共生社会における諸問題を解決するためには、その歴史的背景を認識し、外国人や異文化に対して偏見を持つことなく受け入れる態度を育てることが重要である。

4. 学 習 指 導 案

(1) 単元名：日本の発展と世界の動き

(2) 単元目標

◇関心・意欲・態度：高度経済成長以降の日本と世界の政治・経済の動きに対する関心を高め、自らが国際社会に生きる一員であるという視点から、主体的・意欲的に追究し、異文化を尊重する態度を身に付け

ることができる。

◇思考・判断：高度経済成長以降の日本と世界のあいだに関連した歴史的事象に注目して，高度経済成長以降の日本の動きを，外交，経済，生活，文化，科学技術などさまざまな面から，多角的に考察し，公正に判断できる。

◇技能・表現：高度経済成長以降の日本と世界の動きに関する文献，映像，統計・グラフ，新聞，見学・調査の結果など，さまざまな資料を収集し，適切に選択して活用するとともに追究し，考察した過程や結果をまとめ，説明できる。

◇知識・理解：高度経済成長以降の日本の動きを，関連する世界の動きを背景に理解するとともに，国際社会において日本の役割が重要になってきたことや日本にも多文化共生社会が形成されつつあることに気付き，その知識を身に付けることができる。

(3) 指導計画

① 世界の動きと日本の高度経済成長…… 3 時間

1. 冷戦を中心とする世界の動き（1 時間）
2. 高度経済成長と科学技術の発達（1 時間）
3. 国民生活の向上と諸問題の発生（1 時間）

② 世界の動きと日本の変化…… 2 時間

1. 石油危機から冷戦終結までの世界の動き（1 時間）
2. 日本の外交，社会・経済の変化（1 時間）

③ 国際化の進展と日本の役割…… 2 時間

1. 冷戦終結以後の紛争と国際化の進展（1 時間）
2. 国際平和・国際協調における日本の役割（1 時間）

④ 日本における多文化共生社会の形成…… 1 時間（本時）

(4) 本時の指導（ねらい，展開，評価ポイント）

① 本時のねらい

1. 資料を活用して，日本でさまざまな異文化を持つ移民が増えて，多文化共生社会が形成されつつあることを認識する。
2. 日系移民が増えた背景を正しく理解することで，日系移民への偏見をなくし，異文化を尊重する態度を身につける。
3. 歴史的学習の終わりとして，現在から未来の社会を展望する。

② 本時の展開

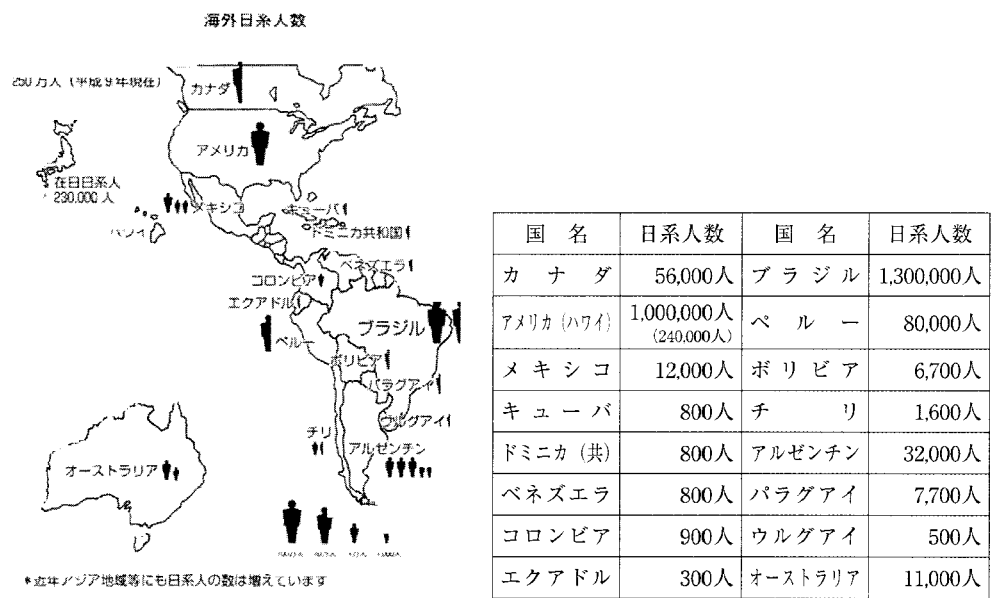
過程	教師の指導・主要な発問	生徒の学習活動	留意事項・資料
導入	<p>問：どのような場所です外国人をよく見えますか？</p> <p>問：その外国人は何人でしたか？</p> <p>問：(アメリカ人と答えた生徒に)なぜアメリカ人と分かったのですか？</p> <p>問：英語を話していたら、アメリカ人なのですか？</p> <p>問：(中国人と答えた生徒に)：中国語を話していたからですか？</p> <p>問：言葉で分からないとしたら、どうしますか？直接聞きますか？</p> <p>問：外国人はなぜ日本にいますのでしょうか？</p> <p>問：日本にいる外国人とどのように付き合えばよいのでしょうか？</p> <p>本時の課題の提示：</p> <p>①どの国の外国人がどのくらいいるのか？</p> <p>②なぜいろんな国の外国人がいるのか？</p> <p>③外国人とどのように付き合えば良いか？</p>	<p>答：観光地、街なか、駅、近所、近くの商店、など。</p> <p>答：アメリカ人、中国人、フィリピン人、分からない、など。</p> <p>答：英語を話していたから。</p> <p>答：イギリス人だったかも知れない。分からない。</p> <p>答：中国語かどうかは、分からない？</p> <p>答：分からない。失礼だから聞けない。</p> <p>答：働いている。観光している。住んでいる。勉強に来ている。</p> <p>答：分からない。</p>	<p>できるだけ多くの生徒から聞く。</p> <p>できるだけ多くの生徒から聞く。</p>
展開①	<p>問：どの国の外国人がどのくらいいるのかを、どうやって調べればよいのか？</p> <p>指示：インターネットで調べよう。</p> <p>問：どこの国から来た人が多かったのでしょうか？</p> <p>問：最近増えているのは、どこの国から来た人でしょうか？</p>	<p>問：役所で聞く。本で調べる。外国人にアンケートする。など。</p> <p>インターネットで調べる。</p> <p>答：韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピン、ペルー、アメリカの順。</p> <p>答：ブラジルやペルー。</p>	資料1
展開②	<p>問：韓国・朝鮮人が一番多かったのはなぜだと思いますか？</p> <p>問：次に中国人が多かったのはなぜだと思いますか？</p> <p>問：ブラジル人は、なぜ最近増えているのでしょうか？</p> <p>指示：プリントの資料を見ましょう。</p> <p>問：どんなことが分かりますか？</p> <p>説明：「日系人」という語句について。「日本人を祖先にもつ外国人である」</p> <p>問：なぜ、南米に日系人が住んでいるのでしょうか？</p> <p>指示：プリントを読んで見ましょう。</p> <p>問：どんなことが分かりましたか？</p> <p>説明：明治以降の移民について</p> <p>問：では、なぜ、今、日系人が日本にやってくるのでしょうか？</p>	<p>答：戦前に、日本に強制連行された人たちの子孫がいるから。</p> <p>答：残留孤児の帰国者や留学生が増えたから。</p> <p>答：分からない。</p> <p>答：ブラジルやペルーなど南米には、多くの日系人が住んでいる。</p> <p>答：昔、日本から南米へ移民したから。</p> <p>答：日本での生活が貧しかったから多くの人々が移民した。</p> <p>答：ブラジルより日本の方が豊かになったから。</p>	<p>以前の単元を思い出させる。</p> <p>資料2</p> <p>資料3</p>
展開③	<p>問：日本にやって来た日系人はどのような生活をしているのでしょうか？</p> <p>指示：プリントを読んでみましょう。</p> <p>問：どんなことが分かりましたか？</p> <p>問：言葉のせいだけでしょか？</p> <p>説明：「多文化共生社会」という語句について。</p>	<p>答：日本語が話せないために、仕事や生活の上で、問題を抱えている人が多い。</p> <p>答：文化の違いから、日本人との間で、誤解が起こりやすい。</p>	資料4
終結	<p>指示：私たちは、どのような気持ちで日系人や外国人を接すればよいのか、考えて、まとめてみましょう。</p>		レポート用紙に書かせて、提出させる。

【資料1】 法務省のホームページ「国籍（出身地）別外国人登録者数の推移」

国籍（出身地）	平成4年 －1992	平成6年 －1994	平成8年 －1996	平成10年 －1998	平成12年 －2000	平成13年 －2001
総数(人)	1,281,644	1,354,011	1,415,136	1,512,116	1,686,444	1,778,462
韓国・朝鮮(人)	688,144	676,793	657,159	638,828	635,269	632,405
構成比(%)	53.7	50.0	46.4	42.2	37.7	35.6
中国(人)	195,334	218,585	234,264	272,230	335,575	381,225
構成比(%)	15.2	16.1	16.6	18.0	19.9	21.4
ブラジル(人)	147,803	159,619	201,795	222,217	254,394	265,962
構成比(%)	11.5	11.8	14.3	14.7	15.1	15.0
フィリピン(人)	62,218	85,968	84,509	105,308	144,871	156,667
構成比(%)	4.9	6.4	6.0	7.0	8.6	8.8
ペルー(人)	31,051	35,382	37,099	41,317	46,171	50,052
構成比(%)	2.4	2.6	2.6	2.7	2.7	2.8
アメリカ合衆国(人)	42,482	43,320	44,168	42,774	44,856	46,244
構成比(%)	3.3	3.2	3.1	2.8	2.6	2.6
その他(人)	114,612	134,344	156,142	189,442	225,308	245,907
構成比(%)	9.0	9.9	11.0	12.6	13.4	13.8

(法務省外国人登録者統計，2002年10月現在)

【資料2】



【資料3】

移民会社のコーヒー農園の契約農民募集書には、「移民1人について1日の純収入は金1円20銭」とあった。石工の日給が5～60銭という時代においては、まさにコーヒーの木は「金のなる木」と呼ばれた。

藤原孝章編著『外国人労働者問題と多文化教育』明石書店、1995、p. 38

【資料4】

「ナカムラ・マウリシオさん：生活する上で困ったのは、病院に行ったときに言葉が通じない点である。以前ネルソンくんが肺炎になったとき、S 団地に近い総合病院に連れて行っただが、通訳がいなくて困ったため、今は常勤通訳のいる市中心部の総合病院に行くことにしている。」

「ラマレノ・エンリケさん：以前ブラジル人の友達が遊びに来たとき、大声を出して日本人居住者から注意されたことがあるため、大きな声で騒がないように気をつけている。」

「ヤマモト・マリオさん：日本語の7～8割は理解できる。回覧板や大掃除の日時を通知する掲示を読むのにも困らないし、子供の通う小学校から渡される連絡プリントの内容もたいてい理解できるが、わからない場合にはマリオさんの会社の日本人同僚に尋ねる。……S 団地の近くにある個人病院にかかる事が多いが、日本語で病状を説明するのは難しい。」

「フランシスコ・レオナルドさん：団地の近くにある個人病院や総合病院で受診することが多いが、日本の医者は薬を処方するだけでしっかり調べてくれないのが不満である。」

池上重弘編著『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店、2001、pp. 108–121

③ 評価ポイント

1. 外国からの移民に関する統計・資料を的確に読み取ることができたか。
2. 外国からの移民が増えて多文化共生社会が形成されつつあることを指摘できるか。
3. 外国からの移民が増えた背景や理由を説明できるか。
4. 異文化を尊重する態度が身に付いたか。

(5) 評価基準の設定

◇関心・意欲・態度：高度経済成長以降の日本と世界の政治・経済の動きに対する関心を高め、自らが国際社会に生きる一員であるという視点か

ら、主体的・意欲的に追究し、異文化を尊重する態度を身に付けている。

◇思考・判断：高度経済成長以降の日本と世界のあいだで関連した歴史的事象に注目して、高度経済成長以降の日本の動きを、外交、経済、生活、文化、科学技術などさまざまな面から、多角的に考察し、公正に判断している。

◇技能・表現：高度経済成長以降の日本と世界の動きに関する文献、映像、統計・グラフ、新聞、見学・調査の結果など、さまざまな資料を収集し、適切に選択して活用するとともに追究し、考察した過程や結果をまとめ、説明している。

◇知識・理解：高度経済成長以降の日本の動きを、関連する世界の動きを背景に理解するとともに、国際社会において日本の役割が重要になってきたことや日本にも多文化共生社会が形成されつつあることに気付き、その知識を身に付けている。

5. 結 語

この授業は、現在及び将来の日本で「多文化共生社会」が出現しつつあることを、生徒に認識させることと、その歴史的背景を正しく理解することで、生徒たちが異文化を尊重する態度を育成することを目標としたものである。これは、まったく新しい視点と言える。これまでの歴史的分野の学習においてはほとんど扱われることがなかった、多くの日本人による南米を中心とする海外への移民を歴史事象として扱ったことも意義がある。特に、現在の日本で、日系人が定住して働いていることを理解する上では重要である。

さらにこの授業では、統計資料を読み、分析する能力を育成することもできる。最新の情報を得るためには、インターネットを活用することが大切である。特に、政府機関が作成しているホームページは役に立つ。日本人の南・北アメリカへの移民の歴史や入管法の改定について、もう少し詳しく扱えると分かりやすくなるが、中学生には、在留資格などの用語が少し難解なので、省略した。高校生に対してならば、十分に扱えると思うので、高等学校段階の歴史学習において、同様の視点での教材開発を試みたい。

注

- (1) 拙稿「多文化共生時代の歴史学習―移民史の視点で―」『広島経済大学研究論集』第25

巻第3号(2002年12月刊)

- (2) 文部省『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—社会編—』大阪書籍, 112ページ。
- (3) 同書, 81ページ。
- (4) 法務省の外国人登録に関する統計は, ホームページより公開されており, 簡単に参照することができる。URL は, <http://www.moj.go.jp/PRESS/020611-1/020611-1.html>。

参 考 文 献

多文化共生社会について

- 1. 徐龍達・遠山淳・橋内武編著『多文化共生社会への展望』(日本評論社, 2000年5月刊)
- 2. 伊豫谷登士翁『グローバル化と移民』(有信堂, 2001年7月刊)
- 3. 田村太郎『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』(明石書店, 2000年4月刊)

外国人労働者の問題について

- 4. 駒井洋『日本の外国人移民』(明石書店, 1999年12月刊)
- 5. 宮島喬・梶田孝道編『外国人労働者から市民へ』(有斐閣, 1996年9月)
- 6. リリ川村『日本社会とブラジル人移民』(明石書店, 2000年5月刊)
- 7. 池上重弘編著『ブラジル人と国際化する地域社会』(明石書店, 2001年8月刊)
- 8. 西川大二郎「来日日系人労働者の動向」『国際労働力移動のグローバル化—外国人定住と政策課題』(法政大学比較経済研究所・森廣正編, 法政大学出版局, 2000年3月刊)

日系移民史について

- 9. 移民研究会編『日本の移民研究』(日本アソシエーツ, 1994年9月刊)
- 10. 有末賢「移民研究と生活史研究—日系人・日系社会研究の方法論的課題」『アメリカの日系人—都市・社会・生活—』(柳田利夫編著, 同文館, 1995年3月刊, 229~256ページ)
- 11. 荒井芳廣「『アメリカ大陸における日本人』, その研究の地平」(同書, 257~280ページ)
- 12. 児玉正昭『日本移民史研究序説』(溪水社, 1992年2月刊)
- 13. 今野敏彦・藤崎康夫編著『〔増補〕移民史Ⅰ 南米編』(新泉社, 1994年1月)
- 14. 今野敏彦・藤崎康夫編著『〔増補〕移民史Ⅲ アメリカ・カナダ編』(新泉社1986年5月刊)
- 15. 内山勝男『蒼氓の92年 ブラジル移民の記録』(東京新聞出版局, 2001年1月刊)
- 16. 佐渡拓平『カリフォルニア移民物語』(亜紀書房, 1998年12月刊)